

忘れ得ぬ事ども

松山市 太田 耕治

元愛媛大学教授

「機は良材の如く師は工匠に似たり。縦ひ良材たりと雖も良工を得ざれば奇麗未だ彰れず。縦ひ曲木と雖も若し好手に遇はゞ妙功忽ち現ず。師の正邪に随つて悟の真偽あること之を以て知るべし。」——これは学道用心集の中に拝される道元禪師の御言葉であるが、私は上人を偲ぶごとに此の語を思ひ此の語を思ふごとに上人を偲ぶ。昭和三年の春に初めて上人に御面会申上げた時、唐沢山の別時に御誘ひ下され同山の歴史や風致などを色々御話し下さった序に「唐沢山へは弁栄上人様も汗を流してお登り下さいました」と仰せられた恩師上人に対する無限の感恩の誠を籠められた此の御一言を何時迄も私は忘れ得ない。

経には仏弟子が世尊の説法を聴聞する其の有様を叙して「眼纖毫も相離れず」とあるが、之はそのまま私共が上人の説法を承はる時の形容である。上人の説法は聞くものであると同時に拝むものであった。

昭和五年十月の一行院の別時に参加された某氏から私に寄せられた書翰の一節に曰く、「御上人様の御言葉は愈々力強く、オヤサマはあの大慈の御まなじりを注ぎたまひて私共如何なる罪あるものも早く来よ早く来よ」と申されて御熱誠極まると拝しましたとき御上人様は忽ち下を向き給ふて暫し御涙をこらえらるゝ様で云々と。私は同様の御様子を確か同年の唐沢山の別時の折に拝した。その時には袖から手巾を出してお眼をお拭き遊ばされた。此の無言の御垂示の前に満座寂として声なく、崇高嚴肅の気は堂を圧した。光明主義の安心起行の要諦は此の沈黙の大説法に極まるかと、法筵に連るもの一同寔に稀有の思ひをなした。



松山学生光明会(月照寮同人) (昭和十年一月、松山 大林寺境内・千葉 石井俊一氏蔵)

